

(1) ジェイムズ・ボールドウィンにおける「父」の探求

ジェイムズ・ボールドウィンにおける「父」の探求

—『山に登りて告げよ』試論—

斎藤 忠利

アメリカの黒人作家リチャード・ライト (Richard Wright) (一九〇八年～一九六〇年) がその代表作『アメリカの息子』(Native Son) (一九四〇年) において、白人優位のアメリカ社会の中では殺人行為を犯すことによってしか人間であることを確かめ得なかった黒人青年ビガー・トマスをあえて「生粹のアメリカっ子」(a "native son") と呼んだ時、それは、ライトと同じく一九三〇年代の不況下に作家活動に入ったネルソン・オルダレン (Nelson Algren) (一九〇九年～) がその最初の作品『長靴をはいた者』(Somebody in Boots) (一九三五年) において、不況のため家を失なった浮浪児キ

ヤス・マッケイを「生粹のアメリカっ子」と呼んだのと同じような意味で、一義的には、アメリカ人としてのアメリカ黒人の基本的な諸権利の回復を要求したものであったが、アメリカ黒人とその生得の諸権利が回復されるべき「生粹のアメリカっ子」とするライトの認識は、アメリカ黒人がアメリカ社会の嫡出子として見做されることのなかった歴史的事実の確認と、それゆえにこそ、アメリカ黒人はアメリカ社会の嫡出子として認知されるべきだとする認識へと移行・発展する契機を含んでいた。従って、アメリカ黒人の私生児性の問題⁽²⁾をその文学の基軸に据えた黒人作家ジェイムズ・ボールドウィンの

(James Baldwin) (一九二四年)

「) は、リチャード・ライトの「抗議の文学」に抗議する形で作家としての出発を行なったとされるにも拘らず、アメリカ黒人の歴史的・社会的な性格をどう捉えるかという其本的な認識の点で、ライトの遺産に負うところが少なくないと言わなければなるまい。

だがしかし、ライトにおけるアメリカ黒人の問題が、階級問題ないしは人間一般に共通する問題として普遍化されるにつれて、その観念性もしくは抽象性をあらわに示すようになった嫌いがあるのに対して、ポールドウィンにおけるアメリカ黒人の問題は、あくまでもその固有性を失わず、アメリカ黒人を正當にアメリカ社会に位置づける問題として提起されているのであって、ここに、ポールドウインをその先輩作家ライトから区別する質的な差違がある。

ポールドウインの出世作たる長編小説『山に登りて告げよ』(Go Tell It on the Mountain) (一九五三年) は、ポールドウイン個人における私生児の問題——ポールドウインは、再婚した母親の連れ子として、職工として働く傍らキリスト教の平信者説教師をつとめた継父の白眼

視のもとで生い育った——が、キリスト教信仰を媒介とすることによって、アメリカ黒人の私生児性の認識を導き出した経緯を明らかにしてくれるが、そこに一貫して認められる問題は、ポールドウインにおける「父」の探求もしくは「認知」への要求の問題であり、小論は、この問題に焦点を合わせながら、『山に登りて告げよ』の世界を解明しようとする試みである。

* * * * *

議論に入る前に、ポールドウインがいわゆる「大移住」——第一次世界大戦を契機として、アメリカ南部の農村地帯から、低く見積もっても五〇万人に及ぶ黒人たちが、北部の工業都市に集中的に移り住んだ現象——の結果としてニューヨークのハーレムで生まれ、キリスト教信仰の枠の中で成長したという基本的な事実をふまえて、一般論として、北部の都市生活に入ったアメリカ黒人におけるキリスト教体験のもつ意義を、エドワード・マーゴリーズの黒人作家論『アメリカの息子たち』(Edward Margolies, *Native Sons*) (一九六八年) の助けを借りて、以下に吟味しておきたい。

(3) ジェイムズ・ポールドウィンにおける「父」の探求

上述したようなアメリカ黒人の北部への移住は、アメリカ黒人の文化体験における一種の断絶を意味するものと言えるが、北部の都市生活の特徴として、アメリカ黒人に対する人種差別が目に見えない壁のようなものであるために、アメリカ黒人の立場が曖昧となり、アメリカ黒人は、絶えず心理的な緊張を強いられ、不安と孤立感に陥らざるを得ない。

そのような状況において、北部諸都市の黒人教会は、アメリカ黒人種としての連帯感を与え、また、南部における過去の生活との心理的なつながりを回復させ、さらには、宗教的な情熱という形でアメリカ黒人の憤り、恐怖感ないしは欲求不満を表現させ得る場所となった。(このことに関連して、アメリカの黒人教会が、いわゆる黒人解放運動の拠点として、その運動の推進力を提供してきた歴史的事実も指摘されてよいであろう。)

このような黒人教会の社会的な機能を、アメリカ黒人——ポールドウィンの問題との関連で、とくに実の父親を知らない黒人少年の肉体的・精神的な成長という具体的な問題に即して考えてみると、黒人教会は、性(セックス)に目覚めた黒人少年が、キリスト教の神を「父」

として選ぶことによって、人種差別という形をとって黒人男性の去勢化を迫るアメリカ社会の性的抑圧(性的抑圧)から身を守り、男としての自覚を得ようとする場所となる。

しかしながら、黒人教会は、性に目覚めたことによっておのが身の内外に脅威を感じるようになった黒人少年の「避難所」であるばかりではない。なぜなら、キリスト教信仰において黒人少年の「父」となったキリスト教の神は、アメリカ社会におけるアメリカ黒人をその苦しみの中に見捨ててきたという紛れもない歴史的事実に徴して、はたして黒人少年の真の「父」たり得るか、という深刻な疑念が根強く残るからであり、また、キリスト教の神は、黒人少年の「父」となることで、黒人少年に貞節を誓わせ、そのことによって、いわば黒人少年の女性化を要求するからである。(ここで、キリスト教信徒が、ときに、キリストの花嫁と呼ばれることを想起することは無駄ではあるまい。)ここに至って、黒人少年における「父」の探求と、「父」をもつことによって男としての自覚を得ようとする試みは、質的な変化を受けざるを得ない。そこで、たとえば、黒人教会に逃げ込んだ黒人少年は、残された道として、男性アメリカ黒人の去勢化

をはかるアメリカ社会の圧力を、「父」なる神の前で女性となるという形で受けとめ、そのことを通じて逆説的に男としての自覚を得ようとする。ここには、キリスト教信仰とのかかわりの中で生起する、男色への傾斜をはらんだ黒人少年の性的・情緒的な歪みの問題が露呈されているが、その問題は、典型的な形で、ポールドウィンの文学の問題になっている。我々は、ようやく、『山に登りて告げよ』について語り得る地点に辿り着いたようである。

* * * * *

すでに翻訳もあることであり、今更らしく述べるのは気がひけるが、『山に登りて告げよ』は、ポールドウィンが十四歳の夏に体験した宗教体験をもとにして、アメリカ黒人におけるキリスト教信仰の意義を追求したものであり、題名は、イエス・キリストの誕生をあまねく告げ知らせよ、という趣旨の黒人霊歌の一節である。

順序として、まず、この作品の構成を説明しておく、この作品は、その全体が三部にわかれ、その第一部「安息日」では、主人公の黒人少年ジョン・グライムズの十

四歳の誕生日の出来事が描かれ、第二部「聖徒たちの祈り」では、その日の夜を徹して開かれた祈禱会の際の回想という形で、ジョン少年の肉親たちの暗い過去が明かされるに出され、第三部「禾場」は、物理的な時間の経過の上で第一部と直接つながり、ジョン少年が徹夜の祈禱会でキリストの「救い」にあずかる話が語られている。

さて、ニューヨークのハーレムに住む黒人少年ジョンは、その継父が教会の役員をしていることもあって、将来、キリスト教の説教師になるものと期待されており、本人も、漠然とながら、その気になっている。ジョンの家族構成としては、両親のほか、異父弟妹として、弟のロイ、妹のセアラ、ルースがおり、生活は貧しい。

その日——一九三五年の三月のある土曜日——は、ジョン少年の十四回目の誕生日にあたり、ジョン少年は、誕生日のお祝いとして母親から小遣いを貰って映画を見に行くが、映画から帰ってみると、日頃から不良じみている弟のロイが、白人たちと喧嘩をして額に大怪我をしており、伯母（継父の姉）も来ている。継父は、実子のロイを溺愛していて、そのため、ロイの負傷でいきり立ち、監督不行き届きだとばかり、母親に平手打ちをくら

わせる。これを見たロイは、父親を罵倒し、逆上した父親は、ロイをなぐりつける。その夜、ジョン少年は、教会堂に出掛け、牧師の甥で、すでに献身している十七歳の青年イライシャと、たわむれに取っ組み合いをしながら、教会の掃除をするが、そこに信者たちが姿を見せ、また、ジョン少年の両親と伯母もやって来て、徹夜の祈禱会が始まる。

そして、その祈禱会で、フロレンス（ジョン少年の伯母）、ゲイブリエル（ジョン少年の継父）それにエリザベス（ジョン少年の実母）が、次々と祈り始めるが、その祈りは、祈っている人々を過去の生活の回想へと引きずり込む。

ところで、その回想を通じて明らかにされるジョン少年一家の系図を整理してみると、以下のようになる。

レイチエル——ジョン少年の継父ゲイブリエルの母。

アメリカ深南部の黒人奴隸であった。

フロレンス——レイチエルの娘。ゲイブリエルの姉。

娘時代に女中として白人の家で働いたが、白人の主人から妾になれと言われて家をとび出し、北部に出

て結婚するが、女を作った夫フランク（のちにフランス戦線で戦死）に捨てられた後、ニューヨークに渡り、乳飲み児だったジョン少年をかかえて働きに出ていたエリザベスと知り合い、エリザベスを弟のゲイブリエルに紹介する。

ゲイブリエル——レイチエルの息子。少年時代は、手のつけられないほどの不良で、大酒飲みになったが、キリスト教に改宗して説教師になる。純粋な信仰に生きるその妻デボラは、娘時代に白人の男たちによって輪姦されたこともあって子供ができず、若い女エスターと不義の関係を結び、不義の子ロイアルを儲けるが、ロイアル（のちにシカゴで殺される）を認知しようとしめない。妻デボラの死後、北部に移り住み、ジョン少年の母エリザベスと再婚するが、この再婚がキリスト教の神が示してくれた新しい生活の道であると考えようになっている。エリザベスとの間に一男、二女がある。

エリザベス——ジョン少年の実母。メアリランド州に生まれたが、その母の死後、叔母の手によって父親から引き離され、叔母の家から働きに出るが、そこ

で知り合った青年リチャードと肉体交渉をもち、ジョン少年を腹に宿すが、リチャードが、無実の罪で逮捕されたことが原因となって自殺してしまうと、父を知らずに生まれたジョン少年を連れてニューヨークに渡り、そこで知り合ったゲイブリエルの妻となる。

やがて、その夜の祈禱会は、緊張と興奮の度を増し加え、そのような状況の中でジョン少年は、さまざまな情念に捉えられ、なにか宇宙的な力が体内に働くのを感じて、一種の恍惚状態に陥り、教会堂の床に倒れたまま一夜を明かす。そして、そのことによって、ジョン少年はキリストの「救い」にあずかったことになる。継父のゲイブリエルは、実子のロイが「救われていない」のに、私生児のジョン少年が「救い」にあずかったことを快く思わない。

夜が明けて、教会堂の床から起き上がったジョン少年は、信仰の先輩イライシャに、自分が「救われた」ことを記憶しておいてくれるようにと懇願して、朝の光の中を家路につく。

以上の粗筋に従って、ジョン少年が抱えることになった精神的・心理的な問題を拾い上げてみると、第一部「安息日」では、ジョン少年における性の目覚めと、私生児性の自覚の問題があり、この問題がキリスト教信仰とからんで出てくるところに、ジョン少年の精神的・心理的な危機が生起する。

ジョン少年は、物心がついた頃から、毎週日曜日になると、街にたむろする「罪人たち」——酒とセックスに身をもちくずした男や女たち——を尻目に、家族の者たちと教会の礼拝に出席していたが、ある時、弟のロイといっしょに、廢屋の地下室で男女の性交の現場を目撃し、激しい恐怖感に襲われる。ところが、その一方で、ジョン少年は、それと同じ行為を、日曜日毎に礼拝に通う両親が行なっていることを感付いていた。また、ある日曜日には、すでに聖職者への道を歩み始めている青年イライシャが、礼拝のあと、女性との交際について牧師から注意を受けるところを見ていた。しかし、問題は外にはばかりあるのではない。実は、ジョン少年自身が手淫をおぼえて、罪意識に怯えるようになっていた。

彼(ジョン少年)は、罪を犯していた。聖徒たちがおり、母があり父がありながら——ごく早い頃から色々警告を聞いておりながら、彼は自らの手をういて許し難い罪を犯していた。学校の便所の中で、ひとりになって、誰の小便が人より高く上がるかと、お互いに賭けをし合おう、年上の、大柄で勇ましい男の子たちのことを考えながら、彼は、とても口に出しては言えない肉体の変形がわが身に起こるのを見つめていた。

このような性の目覚めに伴なう罪意識の問題と重なって、ジョン少年の精神的な苦しみとなるのが、すでにふれておいた、ジョン少年における私生児性の自覚の問題である。この問題は、ひとつの象徴的な事実、つまり、彼の誕生日が見過ごされかねないという事実⁽⁶⁾に端を発している。現に、彼の誕生日が、誰にも気付かれずに——彼の母親にさえ気付かれずに空しく過ぎてしまったことが一度ならずある。そこで、十四回目の誕生日の朝、罪意識をかかえて目覚めたジョン少年が最初に考えたことは、その日が彼の誕生日にあたることを誰かが思い出してくれるであろうか、ということであった。

案の定、誰も彼の誕生日のことを憶えていてはくれな
いかに見えたが、昼近くになり、あと二時間もたつと父
親が帰宅する頃になって、洗濯をしていた母親が、誕生
日のお祝いにと、わずかの金をジョン少年の手に握らせ
る。しかし、「おっ母さんはおまえを頼りにしているよ」
とか、「おまえには分らないことが沢山あるんだよ。で
も、心配することはない。主なる神様は、おまえに知ら
せたいとお思になることは、のこらず、折をみて、明
らかにして下さるからね」という、母親の謎めいた言葉
や、母親が父親には内緒で誕生日のお祝いをしてしてくれ
ているらしい事情——「お父ちゃんが帰って来ないうちに、
(欲しいものを買いに)行ったほうがいいよ」という母
親の言葉に暗示されている——から、ジョン少年は、自
分の生い立ちに関して疑問を抱くようになる。

しかも、その日、ジョン少年が誕生日のお祝いに母親
から貰った小遣いで映画を見て帰宅すると、弟のロイが
額に大怪我をして家に帰っている。父親がジョン少年の
姿を見かけて、「これまでずっと、どこに行っていたんだ」と嗷鳴る。

その言葉以上に、父親の顔つきで、ジョンは、たちどころに、敵意と恐怖心に身体をこわばらせた。父の顔は、怒ると形相がすさまじくなるが、今は、その顔に怒り以上のものがあらわれていた。ジョンは、ここで、これまでに見たことのないもの、彼自身の報復的な妄想の中でしか見たことのないもの——その顔を若く見せると同時に、名状しがたいほどに老けさせ、残酷そうにも見せる、なにか激しく泣いているような恐怖の色を見てとった。そしてジョンは、父の眼が彼を見まわしたその瞬間に、ロイが横たわっているソファに、彼が横たわっていない、という理由で、父が自分を憎んでいることを理解した。ジョンは、父の眼をまともに見ることができないほどであつたが、それでも、ちょっとした間、何も言わずに父の眼をまともに見ながら、心の中に奇妙な勝利感を感じつつ、父を恥じ入らせるためにも、ロイが死んでくれたらと内心ひそかに思っていた。⁽⁸⁾ (傍点は筆者)

このようにしてジョン少年は、溺愛されて不良化した弟ロイとは対照的に、その存在を父親に喜ばれない人間、父親から見捨てられた人間、「父」をもたない人間とし

ての意識を強めていくのであるが、そのような私生児性の自覚は、キリスト教信仰によって触発された、性の目覚めを恥じる罪意識と相俟って、ジョン少年の中に、キリスト教の神によって見捨てられた「汚れた者」としての意識を植えつけずには置かない。そこで、ジョン少年は、「汚れた者はさらに汚れたことを行なうままにさせよ⁽⁹⁾」という言葉を、自分自身について言われた言葉として理解するのである。

以上、第一部「安息日」について見た、ジョン少年における罪意識を伴った私生児性の問題——「汚れた者」として見捨てられた人間の問題は、ジョン少年一家の過去を明かすみに出す第二部「聖徒たちの祈り」において、アメリカ黒人の歴史的・社会的な性格の象徴として捉え直されている、とすることができるといえる。というのも、「グライムズ」という姓をもつ——「グライム」(“grime”)は「汚れ」を意味する⁽¹⁰⁾——ジョン少年一家の暗い過去、とりわけ、継父ゲイブリエルの罪と汚れに満ちた過去の生活は、アメリカ黒人が、「白い」アメリカの価値観のほかに自己を評価する基準を一切もたなかったことによって、アメリカ社会において「汚れた者」

とされてきた歴史的状況を反映しており、また、ジョン少年が実の父を知らず、その継父ゲイブリエルも実の父を知らず、ジョン少年の母エリザベスも実の父に見捨てられている、という設定は、アメリカ黒人が「見捨てられた民」であった事実を示そうとしているからである。

ところで、その昔、イスラエル民族（ユダヤ民族）の族長であり、キリスト教信仰の父と言われるアブラハムは、その妻サライ（のちにサラ）との間に長いこと子供ができなかつたので、サライの勧めもあつて、エジプトの奴隷女ハガルと関係を結び、私生児イシマエルを儲けるが、皮肉にも、その後になつて、サライとの間に嫡子イサクが与えられ、その結果、ハガルとその子イシマエルは追放されて、荒野をさまよう身となつた。

この『旧約聖書』の故事に見られる、信仰の父アブラハムとその罪の子イシマエルの関係は、キリスト教の説教師となつたゲイブリエルとその不義の子ロイアルとの関係、また、同じくゲイブリエルと私生児ジョンとの関係に引き継がれていく。「因みに、『山に昇りて告げよ』が、『聖書』とくに『旧約聖書』から多くの着想を得ていることは、その登場人物の名前から窺われる。たと

えば、「レイチエル（ラケル）」は、イスラエル民族の祖ヤコブの妻の名、「デボラ」は、イスラエル人をカナン人から救うのを助けた女預言者の名、「エスター（エステル）」は、ペルシャ王アハシエロスの妻となつて、イスラエル人をハマンの殺戮から救つたユダヤ女性の名、そして「イライシャ（エリシャ）」は、大預言者エリヤの後継者に任命された預言者の名である。しかも、ゲイブリエルの母、つまり、ジョン・グライムズ一家の先祖を「レイチエル（ラケル）」と名付けているところに、アメリカ黒人を、かつてエジプトの地で奴隷の苦役に呻吟したイスラエル民族（ユダヤ民族）になぞらえようとするボールドウィンの意図が読み取れるであろう。」ここに至ると、継父ゲイブリエルと私生児ジョンとの関係は、キリスト教文化の是認ないしは黙認のもとで人間を奴隷化した罪業を過去にもつ「白い」アメリカと、正にその罪業の結果として生まれたアメリカ黒人の関係を示す、極めてユニークな象徴としての機能を帯びてくる。

なお、ゲイブリエルは、その不義の子ロイアルを認知しようとしなかつたように、二度目の妻エリザベスの連れ子ジョン少年を目の敵にしている。しかも、ゲイブリ

エルは、実子のロイが不良化して、大怪我のために祈禱会に出席することもできないでいるのに、私生児のジョンがキリストの「救い」にあずかろうとしていることに危惧の念をおぼえる。祈禱会で讚美歌をうたう信徒たちの声に和して、ジョンの声が聞こえる。

ゲイブリエルは、その声の主がわかった。イライシャが叫び声をあげると、彼は、一瞬のうちに、現実に関連され、いま聞いた叫び声はジョンの声ではなかったか、主なる神の力に打たれて倒れたのはジョンではなかったのか、と心配になった。彼は、あやうく、目を上げて見廻すところだった。しかしながら、それがイライシャであることがわかって、彼の心配は解消した。……

彼の息子たちは、どちらも今宵は、ここに来ていない。これまでに禾場神の審きと救いの業が行なわれる場所で叫び声をあげたこともない。そのうちの一人(不義の息子ロイ)は、死んで約十四年——シカゴの酒場で、喉にナイフを突き立てられて死んでいる。そして現存の息子で、まだ子供のロイは、すでに向こう見ずで、強情になっている。彼は今、口もきかず、父親に反感を抱き、額に繻帯をして、家で

横になっている。この二人の息子が、ここには来ていない。女奴隷の息子でしかない者(エリザベスの連れ子であらうジョン少年のこと)が、正当な相続人の立つべきところに立っているのだ。

……

今、ゲイブリエルは、自分がたててきた証しと、神が示し給うている恩寵の数々のしるしをもって、現存の息子を、その息子を滅ぼそうと待ちかまえている暗黒から身体を張っても守ろうとした。この息子は、父親を、畜生(“bastard”)と罵り、その心は遠く神から離れている。今宵ロイの唇から洩れるのを聞いたこの呪いの言葉が、最初の息子の母(エスタ)がその子を生んだときに口に出した、あの呪いの言葉——遠い昔から、長いこと鳴り響きながら繰り返されてきた呪いの言葉でしかないなどということは、あり得べき筈のことではない——その母は、子を生んだ途端に、その呪いの言葉を唇に浮かべたまま、あの世に行ってしまった。彼女の呪いは、最初の子ロイアルを滅ぼしたのだった。彼は罪のうちに生まれ、罪の中に死んだ——それは神の下した罪であり、当然のことだった。しかし、ロイは、婚姻の床、パウロが神聖だと述べている婚姻の床で生まれたの

だ。そこで、神の国が約束されているのは、ロイに対してなのだ。その現存の息子が父親の罪のために呪われている筈はない。なんとすれば、神は、大いなる呻きをあげ、何年もの年月を経た後、その罪が許されていることを知らせるしるしを与え給うているからだ。それにしても、現存の息子、この向こう見ずな現存のロイアルが、その母親の罪のために呪われているのではないか、という気がする。彼女の罪は、本当に悔い改められてはいないからだ。だからこそ、彼女の罪の生きた証拠——今宵、ひざまずき、聖徒たちの間にもぐり込んでいる侵入者(ジョン少年)が、彼女の魂を神からへだてているのだ。

引用がいささか長くなったが、ここには、人間を奴隷化した過去の罪業がすでに過去のこととして許されている、と思いついでいるばかりか、その罪業の結果として生み出されたアメリカ黒人の存在に対する責任を、自らの責任として主体的に引き受けようとしていない、「白い」アメリカの問題性に対する痛烈な暗示がある。そこで、アメリカ黒人が「白い」アメリカの子——「私生児」であるとすれば、問題は、「白い」アメリカの

「私生児」たるアメリカ黒人が、自分を認知しようとしていない「白い」アメリカを「父」とすべきか否か——一体、アメリカ黒人には、「白い」アメリカ以外に「父」とすべきものがあるのか否か、ということになる。

ジョン少年は、自分を白眼視する継父ゲイブリエルに対して恐れと憎しみを感じ、継父の支配を脱するために、『聖書』の神に祈りを捧げて、キリストの「救い」にあずかろうとする。これは、人間の父を知らなかったナザレのイエスが聖書の神を「父」とすることによって「キリスト」——神の右に座する者となったように、実の父を知らないジョン少年が、『聖書』の神を「父」とすることによって、継父の「息子」であることをやめ、継父と対等にならび得る男としての自覚を持つとうとするのであった。

しかしながら、ジョン少年が「父」として選ぶとする『聖書』の神を、継父ゲイブリエルも彼自身の「父」としている。そうであってみれば、『聖書』の神を「父」として選んだところで、問題は依然として残らざるを得ず、また、継父ゲイブリエルに対するジョン少年の憎しみは消えるものではない。

彼(ジョン)は、父親を愛したく、なかつた。憎みたかつた。その憎しみを抱き続け、いつの日にか、その憎しみを言葉にあらわしたかつた。あれだけ何度もなぐられてゐるからには、父親のキスなどは、もはや受けたくなかつた。彼には、将来いつの日になろうと、どれほど人間が大きく変わろうと、父親の手を握ろうとすることなど、想像してみることもできなかつた。……ほんとに、父親などは死んでしまえばいい！ 他の人々には必ずや道が開けているように、自分の前にも道が開けてくれるといひのに。だが、父親が墓に入ったところで、父親を憎むことだろう。父親は、その状態こそ変わってしまったてはいるだろうが、自分の父親であることには変わりが無い。墓は、処罰のためにも、正義のためにも、復讐のためにも充分ではないのだ。永遠の、絶えることのない、永劫の火の消えることのない地獄に落ちるのが父親の定め。そして、このジョンは、その場に立ち会つて、じつと見守りながら、その場を離れず、にやにや笑つたり、大声で笑つたりして、やつとのことで、父親の苦悶の叫びを聞くことになるのだ。

だが、その時になつても、万事が終わつたことにはな
るまい。永遠の父親。⁽¹³⁾

このように、ジョン少年が継父ゲイブリエルに対する憎しみを捨てきれない、ということとは、結局のところ、彼が継父ゲイブリエルの「息子」であることをやめることができない、ということであるが、そこにアメリカ黒人の宿命的な性格が端的に示されてるのであつて、アメリカ黒人は、好むと好まざるとに拘らず、「白い」アメリカの「息子」であり、アメリカ黒人の「父」である「白い」アメリカがアメリカ黒人をその「息子」として認知しようとする、しないに拘らず、アメリカ黒人は、「白い」アメリカ以外に「父」とすべきものを持たないのである。

従つて、アメリカ黒人は、アメリカ黒人を「汚れた者」として見捨ててきた「白い」アメリカを、自らの「父」として選ばざるを得ない苦しみを抱えていることになるのであるが、その苦しみを、ジョン少年の入信の苦しみとして捉えてみせたのが、第三部「禾場」である。まず、第三部の題名となつてゐる「禾場」は、元來、

農作業の仕事場の一つである「打穀場」のことであるが、それが、キリスト教信仰における象徴として用いられる場合には、すでに引用文の註釈にも記しておいたように、「神の審きと救いの業が行なわれる場所」(とくに、神の審きに力点が置かれている)を意味し、『新約聖書』においては、イエス・キリストの業に関連して、「このかた(イエス・キリスト)は、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう。また、箕を手に持って、打ち場(禾場)の麦をふるい分け、麦は倉に納め、からは消えない火で焼き捨てるであろう」と記されている。

第三部の問題点を解明するための手掛かりとして、因みに、ここで、キリスト教信仰の基本的な性格にふれておくと、「すべての肉なる者は罪のゆえにあなたに来る」とあるように、おのれの罪を自覚した人間は、自らの罪を指摘されつつ、その罪を指摘し給う御方(『聖書』の神)に近づくこととする。そして、「神の義は、その福音の中に啓示され」たこと——すなわち、イエスの十字架において、人間の罪に対する神の審きと許しが同時に生起したことを、——イエスを「神の子」と信ずる信仰

によって受けとめようとするのである。

ジョン少年の入信の過程に、以上のようなキリスト教信仰の基本的な性格が——かなり歪められた形ではあっても——認められることは、論を俟たない。しかしながら、祈禱会の興奮のただ中で祭壇の前の床に倒れたジョン少年が数々の幻想に襲われ、その幻想の中で継父がジョン少年の罪を糺弾する神と同一視されるに及んで、性の目覚めを恥じるジョン少年の罪意識は、彼がかつて浴室で継父の性器を見ていること、また、暗闇の中で行なわれていた継父の性行為を知っていたことを誇ろうとさえする、継父との対抗意識に変質していく。これは、キリスト教信仰の中で「父」を求める過程において、罪意識として自覚されたジョン少年の性の意識が、罪意識としての自己承認を通じて果たそうとする自己主張とでも言うべきものであり、その自己主張が貫かれるところに、その性の意識が審かれつつ許される、という形での、ジョン少年の「救い」は見出される筈なのである。

ところが、継父ゲイブリエルは、ジョン少年の「父」となることを拒むことによって、ジョン少年における性の自己主張をあくまで罪悪視し、そのため、ジョン少年

は、「父」に代わる者として、信仰の先輩イライシャへの接近を図り、ここにおいて、ジョン少年における性の自己主張は、歪められた形——男色への傾向——をとらざるを得ず、そのようにして、ジョン少年の「救い」は、問題を残したまま、実現することになるのである。

もとより、これで、ジョン少年の入信という魂のドラマに含まれている問題の本質を、充分に捉え得たとは言えないであろうが、その問題をアメリカ黒人の問題として捉え直してみると、キリスト教信仰をコンテキストとする、ジョン少年の「罪の自覚と救い」は、キリスト教文化が支配的なアメリカ社会の中で「汚れた者」として見捨てられてきたアメリカ黒人が、正に、その社会の中でこそ拾い上げられるべき人間であることを示し——そこで、ジョン少年の入信の苦しみは、アメリカ黒人を罪の子として見捨てたまま、認知しようとしないう「白い」アメリカを、自らの「父」として選ぶほかないアメリカ黒人の苦しみを表わすことになるのであるが——さらに、ジョン少年の「救い」が、「父」を求める過程の中で実現される、性の意識の自己主張ないしは男としての自覚の確立を内容としていることは、アメリカ黒人を「汚れた者」とすることで性的抑圧が人種差別と結びつき易いアメリカ社会においては、その社会を「父」とするアメリカ黒人の人間としての全人的な解放が、アメリカ黒人の性の解放と不可分の関係にあることを明らかにしている。

* * * * *

こうして、『山に登りて告げよ』は、その「父」を探求することで実現したジョン少年の新生をあまねく告げ知らせ、そのことによってアメリカ黒人の全人的な解放の可能性を暗示する作品となったが、アメリカ黒人の歴史における新時代を待望するポールドウインの悲願は、ジョン少年をはじめとする主要な登場人物の名前にもうかがわれるところである。まず、「ゲイブリエル（ガブリエル）」は、イエス・キリストの先駆者となったバプテスマのヨハネの誕生をその父ザカリヤに告知し、また、イエスの母マリヤにイエスの誕生を告知した天使の名前に由来し、「エリザベス（エリサベツ）」は、バプテスマのヨハネの母の名前に、「ジョン（ヨハネ）」は、バプテスマのヨハネの名前に一致する。⁽¹⁸⁾

そこで、これら三人の登場人物たちがジョン少年を中心に組み合わされると、ジョン少年は、イスラエル民族の救済史の上で、イエス・キリストにおいて実現した「神の支配」——新時代への道を準備したバプテスマのヨハネと同じように、継父ゲイブリエルの過去の生活に象徴される、アメリカ黒人の恥辱にまみれた歴史に新生面を開く人間として設定されていることがわかる。

なお、ジョン少年における「父」の探求、また、「父」を探求する過程で達成されるジョン少年の男としての自覚ないしは性の意識の自己主張の問題が、『山に登りて告げよ』以後のボールドウィンの作品において、どのような形をとることになるかを論ずることは、この小論の予定された範囲の外になることになるので、いずれ稿を改めて取り上げてみたいが、この問題が、ボールドウィンの文学において、アメリカ黒人の全人的な解放の問題として捉えられていることだけは、ここで再確認しておいてよいように思われる。

(1) ネルソン・オルグレンは、一九六五年に出版された『長靴をはいた者』のペーパー・バックス版に寄せた序文の中で、この作品を *Native Son* とどう題名のもとで書き

始めたことを明らかにしている。なお、この作品の第一部は「The Native Son」と題されている。

(2) この問題は、拙論「ジェイムズ・ボールドウィンにおける『黒人問題』」(『一橋論叢』第五十九巻、第一号)の中で論じておいた。参照していただければ幸いである。

(3) エドワード・マーゴリーズは、『アメリカの息子たち』の第六章「The Negro Church: James Baldwin and the Christian Vision」の中で、ボールドウィンの文学の問題をキリスト教との関係において論じている。

(4) アメリカ社会における性的抑圧の傾向が、しばしば、人種差別の形をとってあらわれるという点に関しては、ボールドウィンがそのエッセイ集『次は火だ』の中で行なっている発言——「白人の国、アングロ・チェートン系人種の禁欲的な(“antisexual”)国に、黒人として生まれることは、たしかに大変なこと、言葉で言えぬならほとんど大変なことなのだ」(傍点は筆者)(*The Five Next Times*, p. 44)——の重大さを想起すべきである。

(5) 題名の出典となった黒人霊歌のリフレイン——その歌詞は失なわれており、現在の歌詞は、のちの加筆——を、原文のまま引用しておく、以下の通りである。「なお、この引用は、John W. Work (ed.): *American Negro Songs and Spirituals* (1940) 以下参照」

Go tell it on the mountain,
Over the hills and everywhere.

Go tell it on the mountain that Jesus Christ is born.

- (6) James Baldwin, *Go Tell It on the Mountain* (A Signet Book) p. 17.
 (7) *Cf. Ibidem*, pp. 28~30.
 (8) *Ibidem*, pp. 38~39.
 (9) 『新約聖書』、『ヨハネの黙示録』第二章一節参照。
 (10) 同じに述べた解釈については、Robert Bone, *The Negro Novel in America* (1965) の中の「チャイム・ホール・トゥーン論」(“James Baldwin” pp. 215~239) に負うところが多い。
 (11) 『旧約聖書』、『創世記』第十六章、第二十一章参照。
 (12) James Baldwin, *Go Tell It on the Mountain*, pp. 98~100.
 (13) *Ibidem*, p. 126.
 (14) 『マタイによる福音書』第三章一節、一二節。
 (15) 『旧約聖書』、『詩篇』第六五篇三節。
 (16) 『新約聖書』、『ローマ人への手紙』第一章一七節。
 (17) ジョン少年が継父の性器を見たことで、罪意識を深める、という問題に関しては、ノアの三人の息子の一人ハムが、その父ノアの裸体を見たために呪われた者となったことを伝える『旧約聖書』の故事(『創世記』第九章二〇節~二五節)参照。
 また、罪意識を深めたジョン少年の幻想の中で、継父が

『聖書』の神と同一視され、そのことによって彼の「父」の探求が苦液に満ちたものになる経緯を、以下に引用してみよう――

すると彼の父が近よって来た。「こいつの中から罪を叩き出してやる。罪を叩き出してやるぞ」彼の父の足が近づくとつれて、暗闇全体がゆれ動き、悲鳴をあげた。その足音は、木蔭に身をかくしたアダムとイヴを探して、エデンの園を歩む神の足音のように響いた。それから彼の父は、ジョンの真上に立ち、彼を見下ろした。その時ジョンは、呪いとは瞬間ごとに更新され、父から息子へと新しく伝えられていくものであることを理解した。時間は、雪や氷のように、無関係だ。しかし、荒野を追われてさまよい歩く癡狂した旅人のごとき人間の心が、その呪いを永遠に担いつづけるのだ。

「ジョン」と、父が言った。「ついて来い」
 それから二人は、真っ直ぐな、狭い、狭い道に出た。…
 …やがて、ジョンは、この真っ直ぐな人声のとだえた道をやってくる、年老いた色の黒い女を見た。…：ジョンは、こんなに黒い人を見たことがなかった。ジョンの父は、その女を見て呆然となり、怒りで狂わんばかりであった。しかし、ジョンは喜んだ。彼は、手を叩いて叫んだ――
 「ほら！ あの女の人は、ママより醜いぞ！ ぼくより醜いぞ！」

(17) ジェイムズ・ボールドウィンにおける「父」の探求

「おまえは、悪魔の子であるのが、そんなに得意なのか？」と、彼の父が言った。

しかし、ジョンは父の言うことを聞いていなかった。ジョンはふり向いて、その女が通り過ぎるのを見つめていた。父がジョンの腕をつかんだ。

「あれを見たか？ あれが罪なのだ。あれを悪魔の子は追いかけるのだ」

「お父さんは誰の子？」とジョンが聞いた。

父は、ジョンに平手打ちをくらわせた。ジョンは笑い声をたてて、少し身を引いた。

「見たよ。見たとも。ぼくは、だてに悪魔の子になって

いるんじゃないもん」

……………

「おまえから罪を叩き出してやる。罪を叩き出してやるぞ」

父は、手をふり上げた。ナイフがふり下ろされた。ジョンは、白い坂道をころげ落ちた。悲鳴をあげながら——

「お父さん！ お父さん！」

(Cf. *Go Tell It on the Mountain*, pp. 171~172.)

(18) 『新約聖書』「ルカによる福音書」第一章参照。

(一橋大学助教授)